

國學院大學學術情報リポジトリ

敦煌残卷『天地開辟以来帝王紀』と日本の国生み神話：柱めぐり神婚を中心に

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 占, 才成 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00001546 |

敦煌残卷『天地开辟以来帝王紀』と日本の国生み神話

— 柱めぐり神婚を中心に —

"Tiandi Kaipi Yilai Diwangji" of Dun Huang Documents and "Kuni Umi Shinwa" of Japan

占 才 成

要旨

日本のイザナキ・イザナミの国生み神話と中国の伏羲・女媧神話との比較研究は従来の人類学の調査や『独異志』に関する考察などに残る問題点があり、再検討する必要がある。敦煌残卷『天地开辟以来帝王紀』の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話の研究が進むにしたがって、伏羲・女媧神話とイザナキ・イザナミの国生み神話の影響関係はさらに明らかになった。『天地开辟以来帝王紀』の伏羲・女媧神話はイザナキ・イザナミの国生み神話に比べると、神話構造において吻合しているところが多いのみならず、時間上から言えば、先行研究に参考としての『独異志』より更に合理的な影響の時間を持っているうえに、影響コースから言っても、影響関係がある可能性も高い。また、『天地开辟以来帝王紀』の伏羲・女媧神話にある崑崙山及びそれにかかわりがある建木を分析すれば、崑崙山は日本の天之御柱と同じく意味深く、世界中心の天柱や天と繋ぐ通路・神霊の憑代とし、生産性・豊饒性を象徴し、国生みと人造りの儀式を通して生産性・豊饒性・神霊の憑代を示唆する。日本のイザナキ・イザナミの国生み神話は敦煌残卷『天地开辟以来帝王紀』の伏羲・女媧神話と影響関係がある可能性は高い。

摘要

关于日本伊耶那岐，伊耶那美二神绕天之御柱产生国土的神话与中国伏羲女媧神话相比较的比较神话学研究，历来的研究者主要利用的是人类学的田野调查资料以及中国古文献《独异志》的神话材料，但这两者均存在部分不足，

キーワード：国生み神話 伏羲・女媧神話 『天地开辟以来帝王紀』 敦煌残卷
柱廻り神婚

关键词：“国生み神話” 伏羲女媧神话 《天地开辟以来帝王紀》 敦煌残卷
巡绕合婚

有进一步探讨的空间。敦煌残卷《天地開辟以来帝王纪》为这两则神话的比较神话学研究提供了新的材料。敦煌残卷《天地開辟以来帝王纪》的伏羲女娲神话不仅与上述日本神话在神话结构上有诸多吻合之处，从成立的时间和影响路径上来说，对日本神话产生影响的可能性也更大，更合理。除此之外，通过对中国古籍中的昆仑山，建木等神话意象的分析，也可管见《天地開辟以来帝王纪》与日本神话中昆仑山，天柱，天之御柱之间的相似性及其象征意义。

1 はじめに

日本のイザナキ・イザナミの国生み神話は中国の伏羲・女娲神話と類似しているところが多く、影響関係があると夙に先学の研究によって指摘された。松前健氏は「こうした二尊の神話と、伏羲・女娲の神話とが、幾多の類似したモチーフを持っていることは、両者がもと同源の東南アジア種族の所産であつたらしいことを見れば、不思議はなかろう。」⁽¹⁾とイザナキ・イザナミ二尊の国生み神話と中国の伏羲・女娲兄妹の人類起源神話との吻合を指摘した。伊藤清司氏は「わがイザナキ・イザナミの国生み神話と中国西南少数民族の兄妹婚人類起源伝承の構造上の対応と、その中にとともに認められる手足のない不具児、肉塊を生む、つまり、生み損じという要素が圧倒的に多くを数えるという事実である。」と述べ、「この神話はその先行形を中国大陸系の近親相姦型伝承を求め得る可能性がいよいよ高いことを示唆するのである」⁽²⁾という見解もある。中西進博士は松村武雄氏や土田杏村氏たちの論述を踏まえる上に、「右の博士の考察はその原初型について外来性を注意されるのであるが、私は今、その内から創生神話を取上げ、成書化以前の由来に於て何らかの関係の有するかに思われる北方系要素として、所謂女娲伝説なるものとの類似点を指摘したいと思う」⁽³⁾という卓見がある。

然しながら、従来の研究はまだ残る問題点があり、さらに検討する余地があると考える点から、本稿は敦煌残巻を研究対象としてあらためて伏羲・女娲兄妹の人類起源神話と日本イザナキ・イザナミの国生み神話との関係を検討してみたい。

(1) 松前健「日本神話と古代生活」(有精堂 1970年 P152)

(2) 伊藤清司『日本神話と中国神話』(学生社 1979年 P75)

(3) 中西進「創世神話試論—女娲伝説断片—」(日本文学研究資料刊行会 日本文学研究資料叢書 日本神話 1970年 P83)

2 人類学の調査と『独異志』の考察に残る問題点

伏羲・女媧兄妹の人類起源神話とイザナキ・イザナミの国生み神話との関係について代表的な先行研究は主に二種類に分けられる。その一つは文化人類学民俗調査の方法で中国の南西少数民族の神話とイザナキ・イザナミの国生み神話との比較研究である。もう一つは中国唐の時代の『独異志』などの中国古典文献を巡って文献学の方法で行う比較研究である。前者は大林太良氏・伊藤清司氏らを代表者とし、後者は前述の中西進先生や中国の嚴紹盪先生などの学者を中心とする。

伏羲・女媧兄妹の人類起源神話は中国の南西少数民族の民間伝承に広く分布している。伊藤清司氏は広西の融県羅城付近の傜族・雲南省彝族の三つの例を研究対象として日本神話とを比較し、「以上の三例のうち、前の二つは物めぐり型、後者は神占い型であり、もののまわりをめぐる要素をもたないが、いずれも、イザナキ・イザナミの国生み神話のそれぞれの伝承と類似的である⁽⁴⁾と指摘した。拙稿「伏羲女媧与日本神話——以巡繞合婚為中心」に述べたように、こういう伏羲・女媧兄妹の人類起源神話は中国の南西少数民族に限らず、中国の北方の多数の民族にもよくみられる⁽⁵⁾。楊利慧氏の調査によれば、中国西北地区や中部地方に伏羲・女媧兄妹の人類起源神話及びその変異体の神話が極めて豊かであるから、「女媧信仰は我が国の現在西北地区の渭河流域の一帯に起源したかもしれない⁽⁶⁾という説がある。従来、伏羲・女媧兄妹の人類起源神話の起源に関して、常任侠・聞一多・呂思勉をはじめとする「南方説」と茅盾・王孝廉をはじめとする「北方説」との対立があり、今日までも定説にならない。要するに、「南方説」にしる、「北方説」にしる、こういうふうな神話は中国全土に散在することが分かる。先学によってあげられる中国少数民族の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話の多数の例はここでいちいち贅言しないが、その代表的な一つである前述の伊藤清司氏があげる広西省傜族の神話を検討してみたい。

大雨が続き、大洪水となり、人類は滅亡するが、わずかに、伏羲・女媧の二人の兄妹だけが生き残る。二人は常に天上にのぼって、嬉々として

(4) 前掲書伊藤清司『日本神話と中国神話』(学生社 1979年 P68)

(5) 占才成「伏羲女媧与日本神話——以巡繞合婚為中心」(『外国問題研究』2014年 第四期 P28-33)

(6) 楊利慧『女媧溯源』(北京師範大学出版社 1999年 P80)

戯れて暮らしていたが、やがて長ずるに及んで、兄の伏羲は妻がほしくなり、妹に結婚を迫るが、妹はこれを固く拒む。しかし、兄の欲求がしばしばなので、妹はやむなく、「私を追って駆けてください。つかまえたら、結婚しましょ」といい、一本の大きい樹のまわりをめぐる。兄はいくら駆けても、妹に追いつけないので、一計を案じて、逆まわりに駆け、妹をつかまえる。こうして、とうとう、二人は夫婦となったが、間もなく、妹は子を生んだ。しかし、それは一塊の肉球であった。⁽⁷⁾

これは伊藤清司氏が『日本神話と中国神話』という著作の中で引用したものである。伊藤清司氏の注によれば、右の引用部分は常任侠の「沙坪壩出土之石棺画像研究」（『説文月刊』第一巻・十一期合刊）、のち、『民俗芸術考古論集』（正中書局 1943年）に所収した論文から由来したものである。つまり、これは20世紀30・40年代から中国の民俗や文化人類学者たちが民間口承文学から採集したものである。周知のように、中国では20世紀30・40年代は日中戦争のせいで、数多くの研究者と研究機関は中国南西地方に移るのを余儀なくさせられた。こういう時代背景の下で、中国神話の研究において思いがけない成果を収め、戦争や長距離の移動で書籍や研究資料が紛失したので、中国の研究者たちは西南少数民族の口承文学や民俗などに対して幅広く民俗調査を行い、多量な民間口承神話の素材を発見し、価値ある論文を次々発表した。その代表的なものの一つは聞一多の『伏羲考』である。そして、中華人民共和国が成立して以来、南西少数民族に限らず、多くの民族の口承の神話や民俗などに関する民俗調査が盛んになった。前述の楊利慧氏の博士論文『女媧的神話与信仰』及び氏の著作『女媧溯源』は1993年に張振犁教授を中心とする「女媧神話調査小組」が行なった中原神話調査と関係がある。

このように民俗調査の成果を利用して日中両国の神話を研究するのは、日中比較神話の研究にさらに広い視野を開き、文献の影響関係にも多くの傍証材料を提供することができた。20世紀の初めに王国維氏は二重証拠法という歴史的研究方法を提出し、「吾輩生於今日、幸於紙上之材料外、更得地下之新材料。由此種材料、我輩固得拋以補正紙上之材料、亦得証明古之部分全為実録、即百家不雅訓之言亦不無表示一面之事实。」⁽⁸⁾というように、紙の材料のほかに、地下の新材料も重視すべきだという説がある。この二重証拠法に

(7) 前掲書『日本神話と中国神話』

(8) 王国維『古史新証』(清華大学出版社・1994年・P2)

基づき、黄現璠氏・葉舒憲氏らがさらに三重証拠法を提唱した。特に葉舒憲氏は王国維氏の「紙の材料」・「地下の新材料」の上に、また文化人類学の材料と方法を重んじるべきだという主張が注目される。

民俗調査から採集した口承神話の材料を通して日中神話の影響関係を証明するのは言うまでもなく、いい方法であるといえるが、慎重に対処しなければならないことがあるのではないかと考える。上述のように、先学の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話に対する民俗調査は20世紀の30・40年代から始まり、この民間口承の神話の採録時代は『古事記』の成立年代と1200年以上も離れている。この千年以上の時代変遷の中でいったいどのような変容が発生したかは一つの問題である。近代で採録したものを利用して古代の文献との影響関係を証明する場合、どちらが先か、どちらが後かはもう一つの問題である。無論、中国南西少数民族の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話は『古事記』よりさらに古い時代から伝わってきた可能性があるが、これを証明するにはそれほど簡単ではなかろう。したがって、文化人類学の材料や方法はどのように比較神話学に活用したのかについて慎重に考えなくては行けない。傍証として、または平行研究として使うのに別に問題がなかろうが、影響研究としての比較神話学の研究には、またほかの文献や考古学から得た証拠も必要ではあるまいかと考える。これに関して呂微氏に次の見方がある。

人類学の神話理論と民俗材料は中国古典神話の欠落部分を構築するのに価値ある構想と傍証を提供した。しかし、神話史を改めて構築する時、考古学を含めて広義の歴史学「歴時」的方法も同様に重要である。人類学（神話学を含める）の「共時」的方法で提出した仮説は、もし、また古代文献叙事材料の確認を得れば、疑いを差し挟む余地がない事実判断となるのであろう。⁽⁹⁾

したがって、先学の指摘された通り、中国西南少数民族口承の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話は日本の国生み神話と類似しているところが多いのは間違いないことである。然しながら、それだからこそ、二者は影響関係があると判断できるかどうかはまた検討する余地があると思う。

伏羲・女媧兄妹の人類起源神話と日本の国生み神話との関係を研究するもう一つの研究方法は文献比較に基づいての方法であり、唐の李冗の『独異志』と日本の国生み神話との比較研究である。『独異志』は『新唐書』『宋志』

(9) 呂微「楚地帛書敦煌殘卷与仏教偽經中的伏羲女媧故事」(『文学遺産』1996年第四期P29)

『芸文志』の記載によると十卷あり、原書はすでに失われており、現存する明の嘉靖年代の抄本及び『稗海』所収本はいずれも三巻のみである。その作者は『新唐書・芸文志』と『宋書・芸文志』には李亢、『説郛』本・『崇文総目』などには李元、明の嘉靖年代鈔本及び『稗海』本には李亢、『四庫全書』には李亢と記されている。『独異志』には、

昔宇宙初開之時、只有女媧兄妹二人在崑崙山、而天下未有人民、議以為夫婦、又自羞恥。兄即与其妹上崑崙山、呪曰：「天若遣我兄妹二人為夫妻而煙悉合；若不使、煙散。」於是煙即合。其妹即來就兄、乃結草為扇以障其面。今時人取婦執扇、象其事也。⁽¹⁰⁾

と言っている。中西進先生は『独異志』の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話を考察した上で、その重点を三つ挙げ、「第一は崑崙山にある事、第二は相議って夫妻となる事、第三は呪を唱える事である。」⁽¹¹⁾といい、「蛮族伝説は第一・三点に於て、直ちに日本神話との類似を認める事が困難である。然し独異志伝説をそこに介在せしめる事によってそれは可能になるのではあるまいか。」⁽¹²⁾と指摘した。これに関して嚴紹盪氏もこの三つの要素に注意を払い、「この三要素はほとんど中国多数の民族の伏羲・女媧に関する『偶生神話』の形態の中から由来した」⁽¹³⁾と唱えた。両先生は『独異志』の伝説を発掘し、卓見を発表した。ただし、ここにも一つの問題点が残りに、まだ解決してはいなかった。それは中西進先生も見出し、「無論独異志は唐・李元選であるけれども、唐朝に入って突如として出来上がる伝説は考えられないのであって、かかる女媧伝説に収斂された伝説型に、日本神話との類似性を認めるのである。」と言っている。『独異志』は唐の武宗の朝号が記されているが、黄巢起義のことが書かれていないから、その成立時代は唐の宣宗から僖宗乾符元年までの間、即ち、846年から874年の間とされている⁽¹⁴⁾。唐の武宗は814年から846年までの時代であるから、『独異志』に武宗の朝号があるということから見れば、『独異志』の成立年代は間違いなく『古事記』の後であろう。これもまた先か後かの問題に戻り、後に成立した『独異志』はどのようにして先にある『古事記』に影響を与えたのかが問題である。無論、『独異志』は中西進先生のおっしゃったとおり、「唐朝に入って突如として

(10) 張永欽・侯志明(点校)『独異志・宣室志』(中華書局 1983年P79)

(11) 前掲論文「創世神話試論—女媧伝説断片—」(P91)

(12) 同上。

(13) 嚴紹盪『中日古代文学関係史稿』(湖南文芸出版社 1987年P25-26)

(14) 前掲書『独異志・宣室志』(P1)。

出来上がる伝説は考えられない」が、その前の時代にすでに民間に存在しているのは事実である。然しながら、「イザナキ・イザナミの国生み神話は『古事記』・『日本書紀』の成立時代に突如として出来上がるものとも判断できないであろう」⁽¹⁵⁾。そうであるからこそ、時間上、更に合理的なものを見出したほうがいいと考える。

3 敦煌残卷『天地開辟以来帝王紀』の 伏羲・女媧兄妹の人類起源神話

これまでの伏羲・女媧兄妹の人類起源神話と日本の国生み神話との比較研究は伏羲・女媧兄妹の人類起源神話が『独異志』から初出であると考えられるが、実は敦煌残卷の発掘や点校・研究の進みにしたがって、より古い時代へ遡ることができる。

敦煌残卷『天地開辟以来帝王紀』の研究史を辿ってゆくと、写本の年代・作者及びその内容を系統的に考察する嚆矢は1988年の『敦煌學輯刊』（第一、二合刊）で発表した郭鋒の『敦煌寫本〈天地開闢以來帝王紀〉成書年代諸問題』という論文である。それは30年余り前のことであるが、それ以来、残念なことに「研究者たちは『天地開辟以来帝王紀』に関心を持つのはそれほど多くない」⁽¹⁶⁾。郭鋒氏に継いで呂微氏の『神話何爲——神圣敘事的傳承與闡釋』（2001）、鄭阿財氏・朱鳳玉氏の『敦煌蒙書研究』（2002）、柯楊氏の「敦煌遺書中有關伏羲神話的記載與甘肅民間活態神話之比較」（2004）、陳斯鵬氏の「楚帛書甲篇的神話構成、性質及其神話學意義」（2006）、馬培潔氏の「敦煌寫本〈天地開闢以來帝王紀〉淺談」（2008）、蘇芑氏の「敦煌写本『天地開辟以来帝王紀』考校研究」（2009）などのいくつかの著作もしくは論文があげられる。これらの研究は民俗学・神話学などから『天地開辟以来帝王紀』の内容・価値・性質などを検討し、これからのしっかりした研究基礎を固めた。その中に言及すべきものは郭鋒氏と蘇芑氏の論文である。特に郭鋒氏の研究は画期的な意味を持ち、蘇芑氏に「上述の一連の先行研究を比較して、『天地開辟以来帝王紀』に関する研究はほとんど郭鋒氏の録文を基礎にしたものであり、

(15) 前掲論文「伏羲女媧与日本神話——以巡繞合婚为中心」(P28-33)

(16) 蘇芑「敦煌写本『天地開辟以来帝王紀』考校研究」(『伝統中国研究輯刊(第七輯)』2009年P234)

郭鋒氏の研究はまさに筆路藍縷、埋もれさせることができない功績がある⁽¹⁷⁾と高く評価された。

郭鋒氏の『敦煌寫本<天地開闢以來帝王紀>成書年代諸問題』は『天地開闢以來帝王紀』に対する初めての点校・年代考察などとして重要な意義がある。氏は『天地開闢以來帝王紀』に出てくる地名が隋の時代以前の地名や、本の中に出てくる「女国」・「師子国」が漢の時代に知られる名称などを根拠とし、「本書（『天地開闢以來帝王紀』）の原書成立年代は上限は西晋（265-317）を超えないが、下限は隋（581-618）を超えなく、東晋十六国時期の作品であると考えられているであろう⁽¹⁸⁾」という結論が出た。郭鋒の研究成果は敦煌学の研究者たちに認められ、ほぼ定説になった。これは伏羲・女媧兄妹の人類起源神話と日本神話との比較研究において第二節の人類学の調査と『独異志』の考察に残る問題点を解決するための有力の証拠となる。郭鋒の研究によると、『天地開闢以來帝王紀』の成立年代は下限は隋（581-618）を超えなく、即ち『古事記』成立年代より少なくとも百年近く先である。周知ごとく、この百年間、舒明二年（630）に初回の遣唐使から寛平六年（894）に菅原道真の建言で遣唐使の廃止まで十回以上の遣唐使が派遣された。遣唐使たちは数多くの中国書籍を日本へ持ちかえり、中には敦煌残卷『天地開闢以來帝王紀』と接触する可能性が高い。そして、敦煌残卷『天地開闢以來帝王紀』に書いてある伏羲・女媧兄妹の人類起源神話はすでに中国の民間に広がり、特に中国の江南地方、遣唐使が後期、入唐のために利用する南路・南島路としての揚州・明州・蘇州・越州・杭州などの、もともと中国の江南や西南少数民族が住んでいたと思われる⁽¹⁹⁾長江中下流地方にまで広がったであろう。その中国の南方へ移動した江南・西南少数民族の現在でも伝わっている伝説はもともと中国の江南や東の方の山東地方の遣唐使たちが上陸する地帯や長安へ移動する路線の地域に広がっているかもしれない。つまり、敦煌残卷『天地開闢以來帝王紀』に書いてある伏羲・女媧兄妹の人類起源神話は書籍及び民間口承

(17) 同上。(P234)

(18) 郭鋒「敦煌寫本『天地開闢以來帝王紀』成書年代諸問題」（『敦煌学輯刊』1988 年第一・二期 P104）

(19) 伊藤清司氏は「江南海洋民文化と日本神話」（国文学 日本神話 昭和 53 年 11 月号）という論文に東方の山東半島やその南方の淮水・長江（揚子江）下流域に居住していた夷また蛮は膨張を続ける漢民族によって同化・吸収され、その一分子となり、あるいは追い払われて南方などに移動を余儀なくされたと言い、日本神話と中国の江南地方との関係について考究する場合、江南の住民とその文化を固定的なものとして把握することは妥当でなく、歴史的変遷の中で、流動的に把握されなければならないと指摘した。

伝説を通して、時間上から言うにせよ、伝播コースから言うにせよ、遣唐使の手に入り、日本へ持ち帰られ、日本神話に影響を与える可能性が極めて高い。日本神話と敦煌残卷『天地开辟以来帝王紀』との比較の可能性があるのであるまいかと思う。

さて、『天地开辟以来帝王紀』に書いてある伏羲・女媧兄妹の人類起源神話はいったい上述の今日でも中国の各民族に流布している民間伝説、また日本の国生み神話と類似しているところがあるかどうかは、その原文を見てみよう。

『天地开辟以来帝王紀』は原書が失われており、敦煌文献には四件あるが、すべてが残卷、その番号は斯 5505、斯 5785、伯 2652、伯 4016 で、この四件の中で最も完備なのは伯 4016 である。ここでは蘇芑の校録文を底本として検討しよう。

問曰：三皇・五帝・夏・周・殷・秦・漢・晋、治政所口月多少、祚蒙開誤、未審伏羲因何得續人位？

答曰：伏羲、女媧、因為父母而生、為遭水災、人民死盡、兄妹二人、依龍上天、得存其命。見天下荒乱、唯金崗天神、教言可行陰陽、遂相差恥、即入崑崙山藏身、伏羲在左巡行、女媧在右巡行、契許相逢、則為夫婦、天遣和合、亦尔相知。伏羲用樹葉覆面、女媧用蘆花遮面、共為夫妻。

これは伊藤清司氏・大林太良氏らのあげた中国南西少数民族の伝説とほぼ同型の神話と判断できるのであろう。『天地开辟以来帝王紀』と人類学者の民俗調査で集めた中国現在多数の民族に伝わっている伝説は神話の構成、粗筋、登場人物などのさまざまな点に吻合していることが明らかである。二者をざっと比べると、次の構造がみられる。

- ① 世界の末日は大洪水によるものである。
- ② 伏羲・女媧兄妹はこの大洪水で運よく生き残る。そして、生き残るのは伏羲・女媧兄妹のみである。
- ③ 伏羲・女媧兄妹は天に上ることができる。
- ④ 神様あるいはほかの動物などの助言によって、もしくは兄の頼みによって、二人は結婚するつもりである。
- ⑤ ある方法を採用して結婚できるかどうかを占うと約束する。
- ⑥ 結婚する儀式の中に巡り回る行いがある。また、巡り回りの中心としたものは棒のような木あるいは山などである。

この六点はただ一部の民間伝説を比較対象としてできたものであるが、も

し中国全国の数えられない伏羲・女媧兄妹の人類起源神話を対照すれば、きっとより多くの類似的構造が見いだせるのであろう。先学の研究の指摘されたとおり、中国西南少数民族の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話は日本の国生み神話と吻合しているところが多い。また、上記の分析を通し、その少数民族の神話は『天地開辟以来帝王紀』とは同型の神話ということが分かる。つまり、『天地開辟以来帝王紀』と日本の国生み神話は影響関係があるのであろう。

4 『天地開辟以来帝王紀』の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話と日本の国生み神話

『天地開辟以来帝王紀』と日本の国生み神話との関係を究明する前に、まず、日本の国生み神話を見よう。

『古事記』上巻・二神の結婚には、

於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿。於是、問其妹伊耶那美命曰「汝身者如何成。」答曰「吾身者、成々不成合處一處在。爾、伊耶那岐命詔、「我身者、成々而成餘處一處在。故、以此吾身成餘處。刺塞汝身不成合處而、以為生成国土。生奈何。」【訓生云字牟。下效此】伊耶那美命答曰、「然善」。爾、伊耶那岐命詔、「然者吾与汝行迴逢是天之御柱而、為美斗能麻具波比。【此七字以音。】如此之期。乃詔「汝者自右迴逢。我者自左迴逢。約竟以迴時、伊耶那美命先言「阿那迺夜志、愛(上)袁登古袁。【此十字以音。下效此。】」後伊耶那岐命言「阿那迺夜志、愛(上)袁登賣袁。」各言竟之後、告其妹曰「女人先言不良。」雖然、久美度迺【此四字以音。】興而生子、水蛭子。此子者入葦船而流去。次生淡嶋。是亦不入子之例。(20)

と言っている。また、『日本書紀』卷第一・神代上の本文には

二神於是降居彼嶋、因欲共為夫婦、產生洲国。便以礮馭慮島為国中之柱、【柱、此云美簸旨邇。】而陽神左旋、陰神右旋。分巡国柱、同会一面。時陰神先唱曰、憲哉、遇可美少男焉。【少男、此云烏等孤。】陽神不悅曰、吾是男子、理当先唱、如何婦人反先言乎。事既不祥、宜以改旋。於是二神却更相遇。是行也陽神先唱曰、憲哉、遇可美少女焉。【少女、此

(20) 西宮一民編『古事記』(修訂本)(おうふう 2012年 P27-28)

云鳥等咩。】因問陰神曰、汝身有何成耶。対曰、吾身有一雌元之處。陽神曰、吾身亦有雄元之處。思欲以吾身元處、合汝身之元處。於是陰陽始遵合為夫婦。

『古事記』と『日本書紀』のイザナキ・イザナミ（伊奘諾尊・伊奘冉尊）二神の国生み神話は『天地開辟以来帝王紀』と比べると、類似している神話構造がきわめて多い。この構造を考察すれば、その重点は次のようにあげられる。

- ① 人造りの（人類を作る）主体もしくは国生みの主体は陰陽二神である。
- ② 男女の二神は結婚しよう。結婚の儀式は巡り回りである。
- ③ 結婚する前に、会うなら結婚するという約束がある。（『天地開辟以来帝王紀』には「契許相逢、則為夫婦」ということがあり、『古事記』には「約竟以迴時」ということもあり、みな事前に約束をしたストーリーがある）。
- ④ 儀式の道具として棒のような天之御柱と崑崙山がある。
- ⑤ 巡りまわる方向は男は左から、女は右からである。
- ⑥ 二神の人造りあるいは国生みのプロセスに神様の命令や建言などを受けて行うことがある。

伏羲・女媧兄妹の人類起源神話と日本の国生み神話の右にあげられる部分の粗筋は簡単であるが、その内包は豊かでそう簡単ではない。ここでまとめる六点及び二神話の内包をいちいち分析すると、極めて複雑であり、紙幅の制限をオーバーするであろう。男の神様が左から、女の神様が右から巡りまわるという「男左女右」の思想について清原貞雄氏・中山太郎氏・松本武雄氏らには詳しい研究があり、筆者も「伏羲女媧与日本神話——以巡繞合婚為中心」（『外国問題研究』2014年第4期）で触れたので、ここでは割愛する。次の節では『天地開辟以来帝王紀』に記されている伏羲・女媧兄妹の人類起源神話と日本の国生み神話との柱めぐり神婚の道具としての柱や崑崙山をさらに考察してみたい。

5 崑崙山・建木と天之御柱

木や山・柱などを世界の中心とし、重要な儀式として行うというと、イギリスの社会人類学者ジェームズ・フレイザーの半生を費やして書いた大著『金枝編』を連想しやすい。

ネミの聖域には、ある一本の樹木が生えていて、その木の枝は一本たり

とも折ってはならないことになっていた。ただ逃亡した奴隷だけが、もし可能であれば、その枝を一本取ることが許されていた。この試みに成功すると、この奴隷は祭司と対一の決闘をする権利が与えられ、もし彼が祭司を倒すと代わって支配者となり、森の王 (*Rex Nemorensis*) の称号も得ることができたのである。古代の通説によると、この運命の枝こそアイネイアスが死者の世界への危険な旅を企てるに際し、巫女の託宣によって折り取ったかの〈金枝〉に他ならなかったのである。⁽²¹⁾

フレイザーが描いた聖なる木は王の象徴として極大切な存在である。現在でもヨーロッパで農産物を生育させ、家畜をふやすと信じて五月の柱 (Maypole) を立てる祭りをヨーロッパ全土にわたって広く行うことがよく知られている。大林太良氏は「ヨーロッパの柱——信仰と伝説——」という論文に古代ギリシア・古代ゲルマン・ローラント・古代スラヴ・サーミの柱を考察した上で、「第一に、柱は木、ことに木の切り株と関係があります。第二は、偶像、神像であることが多い。そのことから記念柱という性格も出てきます。第三に、超自然的存在としては、天神や死霊との関係がみられる。第四に、空間上でのトポスとしては、辺境と中心との結び付きがある。第五に、そのほか豊饒性や生命の樹とのかかわりもあります」⁽²²⁾という結論を出した。その中には注意すべきポイントは第四と第五であり、伏羲・女媧の巡りまわる崑崙山とイザナキ・イザナミの巡りまわる天之御柱はこういう意味とかかわりがあるのではあるまいかと考える。

崑崙山は中国の古典思想ではただの山ではなく、神秘的・神聖的な存在として、仙山や天柱のイメージがある。『芸文類聚』に『龍魚河図』の「崑崙山、天中柱也。」⁽²³⁾を引用し、また「晋郭璞崑崙山贊曰、崑崙月精、水之靈府。惟帝下都、西羌之宇、傑然中峙、号曰天柱」⁽²⁴⁾とある。『神異経』に「崑崙之山有銅柱焉、其高入天、所謂天柱也」と言っており⁽²⁵⁾、『史記・司馬相如列傳』張守節正義に引用された『括地志』には「阿憐達山 一名崑崙山、其山為天柱、在雍州西南一萬五千三百七十里。」⁽²⁶⁾と記されている。崑崙山は西王

(21) J.G. フレイザー『金枝編—呪術と宗教の研究1 呪術と王の起源(上)』(国書刊行会 2004年 P38-39)

(22) 大林太良「ヨーロッパの柱——信仰と伝説——」(『遊学叢書 16 巨木と鳥竿』勉誠出版 2001年 P17)

(23) (唐) 欧陽詢(選)・汪紹楹(校)『芸文類聚』(上海古籍出版社 1982年 P130-131)

(24) 同上。

(25) 東方朔『神異経(及其他兩種)』(中華書局 1991年 P27)

(26) 司馬遷『史記(第九冊)』(中華書局 1982年 P3061)

母をはじめとする数多くの神様が住んでいるところであり、上には天とつながり、下には大地の中心とされている。崑崙山は神州の中心地にあり、古代中国人の考えには崑崙山が宇宙の中心と見られ、萩原秀三郎は縄文広場の中心に立てる巨木のように、「胎児がヘソの部分から成長するように、宇宙はその中心から生まれ、そこより世界は四方へと向かって広がっていったのです」⁽²⁷⁾という。『河図括地象』に「崑崙之山為地首、上為握契、滿為四瀆、横為地軸、上为天鎮、立為八柱」⁽²⁸⁾とあり、崑崙山は地の中心として天柱が八つあると述べている上に、「地首」・「地軸」であると主張している。これは日本の天之御柱と同じ意味を持っているのであろう。したがって、『天地開辟以来帝王紀』に記されている伏羲・女媧兄妹が崑崙山をめぐる神婚儀式の道具は日本の国生み神話と同じく、天柱というようなものである。この中心とするヘソのような部分にある天柱から四方へと、世界や人類は広がっていく。日本の国生み神話では国土は天之御柱から四方へ広がり、中国の人造り神話では人類も崑崙山から神州の各地へ広がるようになった。『古事記』の天之御柱に対して、『日本書紀』に「国中之柱」がある。「国中之柱」に関して、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民たちが校注した『日本書紀』には、「国の中央に立てる神霊の宿る柱。柱を廻って性交することは穀物豊饒の予祝儀礼で、中国雲南省の苗族の『豊饒の柱』（山上に立てた柱の周囲を男女が廻り舞い、性的な歌を歌う）の習俗、東日本の小正月の日に夫婦が囲炉裏の周囲を廻る習俗など、今も例が多い。」⁽²⁹⁾と解釈した。また、「国中之柱」という名称自身は前掲書『龍魚河図』の「崑崙山、天中柱也」の「天中柱」と似ていることも注意すべきである。この世界中心の天柱は生産性・豊饒性を象徴し、国生みと人造りの儀式を通して生産性・豊饒性を示唆する。

天之御柱について日本の数多くの学者は関心を持ち、中でも松本武雄氏は先行研究を詳しく整理したが、天を支える柱とみなす素朴な見方や、樹木崇拜・天瓊矛と同一視・性器の標徴など様々な意見がある。また、松本武雄氏の呪術的若しくは宗教的な実修民俗の視角からの考察が注目される。索寧女の『満州四禮集』に、「満州人等。所至之处。遇有所禱。即尋潔淨之木。立為神杆。以祭者。」⁽³⁰⁾とあり、中国満州人が立てる神杆は神また靈魂を招き、

(27) 萩原秀三郎「中国の『柱立て』と太陽信仰」(前掲書『遊学叢書 16 巨木と鳥竿』P32)

(28) 李昉『太平御覽』(中華書局 1960年 P182)

(29) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民ら『日本書紀』(小学館 1994年 P25)

(30) 松本武雄『日本神話の研究 第二巻 一個分的研究編 上』(培風館 1955年 P210)

祖霊や族神の憑代である。また、萩原秀三郎の調査によると、中国ミヤオ族も柱を天と地をつなぐ神様の通路や憑代とみなし、「柱の立つ広場をミヤオ語でヘソを意味する“タウトウ”と呼ばれます。(中略)……大地はヘソで呼吸をし、柱は大地と天空をつなぐ神霊の通路となるのです」⁽³¹⁾とある。以上は民俗学からのヒントであるが、古文献から言うと、『論衡』の道虚編に「如天之門在西北、升天之人、宜从崑崙上。」⁽³²⁾と天の門が西北にあり、天に上る人は崑崙山から登ったほうがいと記されており、『淮南子』の墜形訓に「崑崙之丘、或上倍之、是謂涼風之山、登之而不死。或上倍之、是謂懸圃、登之乃灵、能使風雨。或上倍之、乃維上天、登之乃神、是維太帝之居。」⁽³³⁾と崑崙山に登ると神になれることを言っている。つまり、崑崙山は天に昇れる山であり、天と繋ぐところである。

天と繋ぐというと、崑崙山と関係がある建木も注意すべきである。建木は古代中国人の崇拝していた巨木であり、天と地を繋ぐ宇宙の中心に位置するものとされている。『山海経』の「海内経」に「有木、青葉紫莖、玄華黄実、名曰建木、百仞無枝、有九櫨、下有九杓、其实如麻、其葉如芒、大暉爰過、黄帝所為。」⁽³⁴⁾と、建木は黄帝によって作られたことを記されている。建木に関して、二点を検討してみたい。一つは建木の働きとその性質。もう一つは建木と崑崙山との関係。まず、建木はどのような木であるかという問題について、前述の『淮南子』の「墜形訓」に「建木在都廣、衆帝所自上下、日中無景、呼而無響、盖天地之中也。」⁽³⁵⁾とっており、「衆帝所自上下」によると、建木は天と繋いでいるものとして、衆帝がそれを利用し、天に登ったり降りたりする天梯の働きをする。建木は天地の通路としての性質を持っている。また、「盖天地之中也」からして、建木は天地の中心にあることが明らかである。『呂氏春秋』の「有始覽」にも「白民之南、建木之下、日中無影、呼而無響、盖天地之中也。」⁽³⁶⁾と建木は天地の中心にあることも指摘した。建木は天地の中心にあるのが間違いないが、具体的に言えば、どこにあるかはまた問題になる。『山海経』の「海内経」に「有木、其状如牛、引之有皮、若纓、黄蛇。其葉如羅、其实如欒、其木若菴、其名曰建木。在窺窳西弱水上。」

(31) 前掲論文萩原秀三郎「中国の『柱立て』と太陽信仰」(P31-32)

(32) 王充(著)黄暉(校釋)『論衡校釋』(中華書局 1990年P319)

(33) 劉安(著)何寧(集釋)『淮南子』(中華書局 1998年P328)

(34) 袁珂(校注)『山海経校注』(上海古籍出版社 1980年P448)

(35) 前掲書『淮南子』(P328-329)

(36) 呂不韋(著)陳奇猷(校釋)『呂氏春秋新校釋』(上海古籍出版社 2002年P328-329)

という記述からみると、建木は弱水の上にある。しかしながら、建木の位置に関係がある都廣・弱水はどこにあるかということもまた不明であり、今日でも定説にならない。『山海経』の「大荒西経」に「西海之南、流沙之濱、赤水之後、黒水之前、有大山、名曰崑崙之丘。有神——人面虎身、有文有尾、皆白——處之。其下有弱水之淵環之、其外有炎火之山、投物輒然。」⁽³⁷⁾と、崑崙の丘は弱水に囲まれていることを明示した。崑崙山の下に弱水が流れていることは『山海経』のほかに、『搜神記』にも、「崑崙之虚、地首也。是惟帝之下都、故其外絶以弱水之深、又環以炎火之山」⁽³⁸⁾とあり、崑崙の虚が弱水に囲まれて外と隔てると言っている。崑崙山は弱水に囲まれるのは若干の文献に記されている。前述『山海経』の「海内経」に「(建木が)在寢窳西弱水上」と建木は弱水の上にあるという指摘がある。建木と崑崙山は皆、弱水と繋がりがあり、両者とも弱水の上にあるということからみれば、両者とも同じ場所にあるはずであろう。また、建木は天地の中心にあって天と繋ぎ、崑崙山も天地の中心にあって天と繋ぐ。要するに、建木は崑崙山の上にあるのは問題がないのではないかと考える。伏羲・女媧兄妹婚の中でなぜ崑崙山を廻るか、また、崑崙山はどんな意味を持っているか、これらの問題に関して上述のことを合わせて考えると、理解しにくいわけでもなからう。天と繋ぐ通路・神様の憑代としての棒のような崑崙山と建木は伏羲・女媧兄妹婚神話の中に意味深い。

それでは、日本はどうであろうか。日本神話の中にはこういうふうな神霊の通路と憑代という思想はあるかどうかは松村武雄氏が「我が国人の間には、神は高く聳えるものに降りつくといふ観想・信仰が、古くから殊に著しかった。高く聳えるもののうちで最も普通であり身近であるものは、樹木である。だから神が好んで降りつくものとしての樹木の伝承は古文献にも頻出してゐる」⁽³⁹⁾と指摘した。要するに、日中両国は崑崙山や柱のようなものが神霊の通路と憑代を見做す発想は同様である。

伏羲・女媧兄妹とイザナキ・イザナミ二神はこの世界中心とする崑崙山若しくは天之御柱をめぐる儀礼で神霊の指示に従い、失敗があれば神霊の意見や命令を請う必要があるから、神霊の憑代や神霊と連絡できる通路という儀式的道具が必要である。『天地开辟以来帝王紀』には「唯金崗天神、

(37) 前掲書『山海経校注』(P407)

(38) 干寶(著) 汪紹楹(校注)『搜神記』(中華書局 1979年 P165)

(39) 前掲書松村武雄『日本神話の研究 第二卷 ——個分的研究編 上——』(P212)

教言可行陰陽」と伏羲・女媧兄妹が崑崙天神の指示を受けて男女の遵合をするという記述があり、伏羲・女媧兄妹が崑崙山をめぐるまわった後、「天遣和合」という天（つまり神様）の命令・あるいは天意によって夫婦となる。

『古事記』にはイザナキ・イザナミ二神の国生みの儀式の中にも「於是、天神諸命以、詔伊耶那岐命・伊耶那美命二柱神、『修理固成是多陀用弊流之國』、賜天沼矛而、言依賜也。」⁽⁴⁰⁾と天神の命令で国を生むのである。また、イザナキ・イザナミ二神は不良の子を生んだ後、「於是、二柱神議云、『今吾所生之子不良。猶宜白天神之御所』即共・上、請天神之命。」⁽⁴¹⁾と天神の命を請う。つまり、伏羲・女媧兄妹もイザナキ・イザナミも天神の命令によって人造りあるいは国生みの事業をし、天意で夫婦となり、人造りや国生みの行為をしているうちに何かあったら、天神に命令を請うのである。こういうふうには、天柱は世界の中心のみならず、天神の憑代や天と繋ぐ通路としても重要である。

総じていえば、崑崙山・天之御柱は神話上、同じく意味深い。両者も「空間上でのトポスとしては、辺境と中心との結び付きがある。」また、「豊饒性と生命の樹とのかかわりもある。」と大林太良氏の指摘を注目すべきである。

6 終わりに

本稿の敦煌残巻『天地開辟以来帝王紀』の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話と日本国生み神話との比較研究を左のようにまとめてみよう。

- ①従来、人類学の調査と『独異志』の文献分析に残る問題は影響関係の時間差である。この問題を解決しなければ「疑いを差し挟む余地がない事実判断」となることができない。したがって、敦煌残巻『天地開辟以来帝王紀』のような有力な文献証拠が必要である。本稿ははじめて敦煌残巻『天地開辟以来帝王紀』と日本の国生み神話との比較を試みた。
- ②敦煌残巻『天地開辟以来帝王紀』の伏羲・女媧兄妹の人類起源神話は中国の今日でも民間に伝わっている口承神話と同型である上に、日本の国生み神話とは同じ神話構造を持ち、吻合している処が多い。
- ③敦煌残巻『天地開辟以来帝王紀』の崑崙山と日本国生み神話の天之御柱と同じく意味深く、世界中心や豊饒性などと示唆されている。

(40)前掲書西宮一民編『古事記』(修訂本)(P27)

(41)前掲書西宮一民編『古事記』(修訂本)(P28)